神の使い

13　古柏猴鹿之図　森寛斎

一幅

明治十三年（一八八〇）
絹本着色
本紙二三二・四×一四三・二

清流の流れる林の中、三頭の親子鹿が悠々とたたずみ、その周りで猿の群れが自由奔放に動き回っている。鹿の背でのみ取りをする猿、枝にぶらさがって戯れる猿、その自在な姿や柔らかな毛の質感の表現は、写実を重視した円山派の流れをくみ猿を得意とした森狙仙の画風が、その孫弟子にあたる作者の森寛斎（一八一四～九四）にたしかに受け継がれていることを示している。

鹿は神の使いという神聖なイメージをもつ一方で、古来より中国では「鹿」は「禄（天から与えられた幸い、ひいては富、財産を意味する）」と音が通じていることから、吉祥画題として扱われてきた。本図は、鹿とともに柏（中国でいう柏とはヒノキ科の柏槇（ビャクシン））と猿（猴）を描いており、それぞれ「百」「侯」との音通で、立身出世を意味する「百禄封侯（ひゃくろくほうこう）」を示している。本図は、明治十四年（一八八一）に元老院議官河瀬真孝より皇室へ献上されたとの伝来があり、同年に開催された第二回内国勧業博覧会に出品され妙技三等賞を受賞した《桧鹿猿（深林猴鹿図）》にあたる可能性が高い。

14　白鹿置物　菅原安男

一点

昭和九年（一九三四）
木彫、彩色
一九・〇×三九・〇×五〇・二

『昭和天皇実録』によれば、昭和八年（一九三三）三月十日、昭和天皇は生物学御研究所に出御の際に、御研究所の前で白鹿をご覧になった。この珍しい白鹿は、朝鮮・満州国境付近で捕獲され、間島臨時派遣隊長池田信吉より献上されたという。間もなくこの白鹿は奈良・春日大社へ下賜された。春日大社の祭神、武甕槌命（たけみかづちのみこと）は、白鹿に乗って常陸国鹿島より御蓋山へ降り立ったと伝えられ、白鹿は春日大社の神使とされることの所以による。この春日大社で飼育されていた白鹿を間近に見た彫刻家、菅原安男（一九〇五～二〇〇一）は、「猛く逞しいその姿」に魅せられて、木彫に表した（図録『菅原安男彫刻展』略年譜より、東京藝術大学陳列館、一九七三年）。宮司江見清風の勧めもあり、本作が献上されたのは、翌九年四月のことである。

作者の菅原は奈良市の生まれ。父の大三郎は東京美術学校に学び、後に日本美術院において新納忠之介のもとで国宝修理に携わった彫刻家である。菅原はこの父を早くに亡くしたが、その影響もあり、同じく東京美術学校へ入学、昭和三年の卒業後は奈良へ戻り院展を中心に活動した。本作はこの時期の作品である。昭和十九年には東京美術学校助教授となり、戦後も東京藝術大学で昭和四十八年までの長きにわたり教鞭を執った。昭和二十九年には院展から新制作展へと活動の場を移し、塑造の作品を数多く発表しているが、本作に見られるように、伝統的な技術による木彫を得意とした作家である。

・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

寿ぎの品々を読み解く
三の丸尚蔵館展覧会図録No.75

編集　宮内庁三の丸尚蔵館
制作　株式会社　東京美術
翻訳　黒川廣子
発行　宮内庁
平成二十九年一月七日発行

© 2017, The Museum of the Imperial Collections, Sannomaru Shōzōkan